

2016 年度理工学研究科・工学研究科
「教育・研究等改善アンケート調査」公表のためのコメント

1. 教育・研究等改善アンケート調査の結果について

1) 教育・研究等改善アンケート調査の目的

・2010 年度から実施している大学院生の授業評価アンケートは、学部学生向けの授業評価とは視点を変え、研究指導等についての学生満足度評価の色彩を強めた設問により、研究指導体制や研究教育環境の改善に資する項目にしている。協力いただいた大学院生には感謝したい。教育・研究等の改善を高めるための自己点検活動・FD活動の一環としてここに公表する。

2) 調査方法、調査実施時期

・本年度はアンケート調査の回収率を高めるために、昨年度に引き続き、教員による配票・回収の手続きを取った。

・配票・回収期間は以下の通り。

・調査回収時期は 2016/11/22～2017/1/13 で実施した。

3) 回収結果

・博士後期課程については在籍者 17 名に対して回答者が 10 名（回収率 58.8%、昨年度（63.6%））であった。すべての項目について高い評価を得ているが、個人が特定される可能性があることを配慮し、今回は詳細な公表は行わない。

・博士前期課程については在籍者 130 名のうち、109 名（回収率 83.8%、昨年度 71.2%）の回答を得た。1 年生 49 名、2 年生 60 名である。

4) コメントおよび対応

①大学院進学情報提供

・博士前期課程への進学理由の第 1 は、「研究内容への関心」である。続いて「就職に役立つ」が続いている。この傾向はここ数年変わっていない。研究指導はもとより、キャリア形成・就職支援室との協力関係を密にするなど大学院生向けの就職支援が重要である。大学院生も、学部生向けとは別途に大学院生向けの就職支援活動を行なっているので、情報を積極的に収集・活用してほしい。3 番目に多い項目に「担当教員に教わりたい」となっている。大学院進学希望者を増やすためには、教員による魅力ある授業や研究指導が望まれる。

・大学院進学決定時期は、4 年次が多いが、3 年次に決めたものも多く、3 年次向けの進学ガイダンスが重要である。2014 年度から学部の進級ガイダンスにおいて進学指導をかねて大学院の先行履修制度の紹介を開始している。次いで、学部入学前、学部 1 年次から大学院進学希望者も見受けられる。昨年度と同様の傾向であるが、早い学年で大学院の研究活動の魅力伝える機会の設定が必要であることが確認できた。この状況を踏まえ、理工学部・理工学研究科の活性化に向けた取り組みとして実施している「理工学フォーラム」については、大学院生・学部 4 年生を対象とする現状から学部 3 年生にも積極的な参加を促すような取り組みとしての継続が求められる。

・学部と大学院の連携を田×意味で導入した先行履修制度の実績は 2015 : 47 名、2016 : 26 名である。大学院進学予定者の多くが先行履修制度を活用した結果、大学院の正規授業履修生が極端に少なくなる事態も見受けられるため、先行履修生の受け入れについては慎重な対応が必要である。

・博士後期課程への進学理由は研究内容、「担当教員の指導力」と「研究内容に対する関心」になっている。

②研究指導に関する評価

・博士前期課程の研究指導に対する評価は、おおむね知的満足度を得られたとの評価である。プレゼンテーション能力、専門的知識、情報収集能力が獲得できたとの評価である。昨年度と同様に一部に不満（教員の演習・輪講への取り組み姿勢が意欲的でなかった、知的満足を得ることができなかった）の評価が見受けられた。受講生の履修時の反応などを確認しながらプログラムや内容の精査をする必要がある。

・博士後期課程の研究指導に対する評価は高かった。

③授業科目に関する評価

・授業科目に対する評価についても、例年と同様に、おおむね高い満足を得ている。講義の進捗がはやいとの評価が多いが、少数ではあるが遅いとの指摘がある。少人数教育であるため、履修生の状況を確認しながら講義を進めていく必要がある。開講科目数については、やや少ない、増やしてほしいという要望が 16 名に上っている。受講者数との関係があるが、どのような分野の科目を希望しているのかも含め、検討項目としておきたい。

④研究室等の施設環境

・研究室等の実験機器やPC等についておおむね満足されているが、一部に不足を挙げているケースがある。昨年度と同様の傾向であり、指導教員が研究室ごとに事情を把握し、適切に対応できるように努力していきたい。

⑤研究発表活動支援

・博士前期課程 109 名の回答者のうち、平成 28 年度に博士前期課程では 67 名（昨年度 72 名）、博士後期課程では 7 名が学会発表を行っている。そのうち博士前期課程 40 名（昨年度 32 名）、博士後期課程 3 名は複数回の学会発表を行っている。論文採録数は、博士前期課程では 17 名（昨年度 21 名）、博士後期課程では 4 名が「実績あり」としている。受賞歴も博士前期課程で 4 名（昨年度 2 名）ある。研究発表活動は活発に行われている。

・学会発表等の支援については、研究発表奨励金制度の充実を受けて環境が整ってきている。大学院生の中で学会発表経験者はおおむね良い経験になったとのよい評価となっており、指導教員と協力して積極的に発表機会を作るように努力してほしい。一方で、博士前期課程で 42 名、博士後期課程で 3 名が学会発表奨励金を活用しておらず、積極的な発表活動に臨む姿勢を持っていく必要がある。

学会発表支援については半数以上が自己負担なしで発表できているが、交通費・宿泊費の 2 割以上を自己負担したと指摘する学生が、在席学生の約 2 割（博士前期課程 13/52、博士後期課程 2/6）を占めている。昨年度より改善はしているものの比較的高い割合になっている。また、制限回数を超えた発表機会を申請する学生も見られる。学会発表支援のさらなる充実が望まれる。

・研究発表に関連して、研究が思うように進まないとの思いを持つ学生が博士前期課程で 25 名（昨年度 27 名）、博士後期課程で 1 名である。指導教員や先輩・後輩との日常のコミュニケーションの中で研究推進に努力してほしい。英語の質疑ができない、英語の論文が書けない、との指摘については、サイエンス・イングリッシュ特論の履修を行うことによって、今後の改善を期待したい。

⑥在職やアルバイトについて

在職やアルバイト日数が、週に 4 日以上が 4 名確認できた。社会人入学の院生の数は博士前期課程で 0

名であるが、勤務時間もフルタイムが 15 名となっている。学費や生活費の捻出に必要な対応かどうか確認できないが、研究活動に支障がない状況かどうか、詳細を確認する必要がある。大学院の教育研究と職場・仕事の両立が困難、やや困難とする学生数が 6 名となっており、上記と合わせてフォローアップが必要と思われる。

⑦TA について

・多くの大学院生が TA を担当している実態がある。大学院生数と TA を必要とする授業科目数にアンバランスがあり、結果として、3 名（昨年度 3 名）ではあるが TA 担当については負担に感じている院生がいる。TA 担当については依頼する教員と大学院生側の十分な調整が必要である。教育補助を担当することは研究者・教育者としての素養を養うことにも役立つため、前向きに取り組む姿勢を期待している。

⑧総合評価

全体としては、満足している（非常に満足、満足、やや満足の合計）とする評価が 93 名 79.44%であるが、不満（不満、やや不満、あまり満足していない、の合計）が 10 名（昨年度 5 名）である。昨年度の比べて不満の評価が増加しており、個別の評価内容を踏まえて、改善努力の必要があると思われる。

※平成25年度以前入学生は工学研究科、平成26年度以降入学生より理工学研究科の所属である。

以上

平成29年3月1日

理工学研究科長 秋山哲一